

## 最初の一文を待つということ

——卒業論文を書く学生と——

書き方は教えられるか

もう一世代も昔のこと。ある大学で英作文の授業のシラバスに、担当教員が卒業論文の書き方についても触れるという趣旨のことを書いた。当時のシラバスは今のよつにこぎれいにまとまったものではなく、わずか数行のものが大半だったが、この一文に、春、学生が殺到し、小さな教室がいつになく熱気を帯びた。

当時のシラバスは素っ気なかったが、味があった。「近代を読む」とか、一読なんのことがわからないようなものを有難かった。これはこれで意味がなくもない。教員が詳しいシラバスを半年前に書いても、いざ四月になると、その後の勉強内容を話したくなり、シラバスに書いたことへの興味が希薄化していることもあるからだ。

それはさておき、今は、本体はどうなのかと心配になるほど、うま

すぎるシラバスもある。

英作文の第一時間目が始まった。教員は教科書の説明をする。教科書を買っていない学生が多く、本題は次週からということになった。これで終わりというころ、とうとう、当時の四年生が、卒業論文の書き方は、ときいた。実は、教室に出ていた学生の関心は、その一点に集中しており、英作文は二の次だった。

教員は卒業論文の書き方風の本を一冊紹介し、話はそれでおしまいとなった。学生は落胆した。英作文の授業で卒業論文の書き方に触れるというのだから、論文の英語表現の勉強でもするのかと、期待と不安のいりまざった気持ちで緊張していたのが、技術的な解説書を一冊紹介されて終わりであったのだから、どうおさまりをつけたものか困ってしまった。しかし、学生たちは、自分の不勉強も十分に承知していたから、教務課にかけこむでも、研究室にかけこむでもなく、世間にそううまく話はないものだとなんげした。学生たちは、情報交換に走っ

梅 正 行

た。ある専攻の学生が研究室の助手に、どうしたらよい論文が書けるのですかと屈託なくたずねた。すると、よい論文をたくさん読むこと、これしかない、と言われて、すこすこと帰って来た。

別にその英作文の教員が手を抜いていたのではなからう。手とり足とり指導することで、学生が持っているもつとも大切なもの、つまり、自主性とか想像力とか創造力に傷をつけてしまうことを怖れていたのだと思う。また、しばらくして、その教員の書いた本を読み、注はどつやつてつけるといふことを手とり足とり教えてもらつより、よい本を書いてもらつたほうが学生としてはよほど刺激になるということもわかつてきた。小説の書き方といつた本を読んで小説家になつたという人がいないほど極端ではないが、卒業論文の書き方といつた本を読むより、よい論文を読んだほうがためになるというのは、本当だろう<sup>1)</sup>。

ただ、当時の学生にも今の学生にも共通する点がある。初めての卒業論文執筆に不安の種はいくつもあるといふ点だ。その時、いきなりよい論文を読むことだと助言されても、ますます不安になる。ならば、そういう、創造力とか想像力に関わる部分にいきなり喰らいつくのではなく、形式だけでも考えておこうという対応の仕方もある。よいはずだ。よく指導する教員の学生がよい卒業論文を書くのか、自主性に任せる教員の学生がよい卒業論文を書くのか、これはもう、個別の問題で、一般化のしようもないことを承知の上のことだが。

#### 四年生対象の演習（国際英語学部）と二年生対象の演習（国際教養学部）

学内兼任の教員として、国際英語学部英米文化学科四年生向け演習を担当して数年になる。その前の文学部英文学科のころの四年生向けの演習担当の年数をあわせると、目を通した卒業論文の頁数もタイトルも、すぐに出てこない。たとえばジェイン・オースティンの小説についての卒業論文は結婚に関するものが多いので、作中人物たちの結婚に何度立ち会つたことか。もちろんだれが書いてもプロットに変わりはなからう。作中人物が別の相手と結婚するはずもないし、唐突に新発見が出てくることもない。そういうものが出てきたら、それはそれで、たいしたものだが。

それよりも何よりも、現物としての卒業論文以前の、まだかたちにならない文章の量もある。かたちにならないとは、一応、文章なのだ、何を言いたいのかわからないものことだ。こつこついうものも今はワープロがあるから、だれしも書きがちには違いないが、学生の場合の自分でつくる文章となると特にそれは多いのは、多くの教員の経験するところではなからうか。これが翻訳になると、もつと程度がはなはだしくなる。一応、文字はならんでいるものの、意味がわからない<sup>2)</sup>。

一方、二〇〇八年開設の国際教養学部の教員として第一期生である現在の二年生の演習を担当している。これも、二年生秋学期から多くの学生が海外留学に出て、春学期の関心とはまた別のものへの関心を

育てて帰国することを予想しつつも、学生が二年生から四年生までの間に自分の対象をしだいに絞り、最後には、卒業論文をまとめてくれることを期待しながら運営している。

そのほかに、知人、友人の論文を原稿段階で見たり、自分の論文を原稿段階で見せたり、文学研究科で論文指導をしたり、学会の査読に関わったりと、いろいろな作業があるので、どうやって論文を書くかには、自分の上達の遅々たることを棚上げしたうえでのことだが、常に強い関心をもっている。学外の研究者との話でも、いかに書くかというテーマを通らないことはない。

この最後の論文、自分や研究者の論文は、ある分野に深く関わった者の論文なので、なぜこのテーマであるのか、というところがすでに書き手の内部でかなり整理されている。人が私に論文を見せるのは、二人の間になんらかの前提がすでにあるからであり、私が人に論文を見せるときも、同様だ。大学院生も大学院に入るにあたっては、テーマをすでに絞り込んでいるので、やがて同業者と同じような関係になる。学会の査読の場合も、こと日本語で書かれたものである限り、そう広い世界のことではない。これらはみな動機がはっきりしている。

ところが学部の子の書く卒業論文となると、その上のレベルでは当たり前だが、当たり前でないことがしばしばで、おのおのの学生への対応には柔軟性が求められる。

特に四年生からの担当は、時間制限のなかで、動機を発掘し、かたしにしなければならぬから、骨が折れるものの、これがこちらの瞬間を刺激し、とてもおもしろい。というのも、ひとりの学生がひと

りの教員から学ぶことのできるこの量というのは、それほど多くないのではないかと日頃から感じるものが多く、三年、四年と二年間みっちり付き合つより、四年の、しかも十ヶ月くらいの付き合いのほうが、お互いの啓発密度が濃くなるのではないかと、そうやって互いを追い詰めてかかるほうが、いいものができあがることでは、ないか、と思えるからだ。ただし、教えたり教えられたりの関係では、その基本に待つことがあるはずだが、就職活動の間隙を縫う四年生の卒業論文指導は、待つてはいられない。そのなかでの論文指導は時計をみながらの作業となる。

そこでまず四年生対象の、しかも卒業論文を書くことを目的とする演習をどう運営してきたかについてまとめてみたい。その後、二年生から始まる演習をどう運営するかについても考えたい。

ただし以下では、固有名詞はもちろんのこと、実際に出てきた個別のテーマを出すことを避け、やや抽象的な記述を試みるとする。

### 顔合わせ

四年生第一回目の授業は顔合わせと自己紹介が始まる。就職の面接試験のことなども考え、(一) 英語で自己紹介を行なう。次にA4の用紙に(二) これまで自分で読んだ本、授業で紹介された本のなかからひとつも感動した本を書いてもらう。すでに卒業論文のテーマを考えている学生にはそれを書いてもらう。ここで何冊も書く学生は、すでに教員の負担を半減しているということになる。あとはそこから対

象をしぼるだけだ。テーマが決っていれば、ますますよい。次に(三)その用紙に書き記した作品、場合によってはテーマについて、教室で説明してもらう。(四)一人が説明を終えたら、残りの学生全員に質問ないしコメントを求める。学生数は十人前後なのですぐに二巡する。こうしてお互いの関心のありどころを理解しておく。

この時点で約半数以上の学生が、自分の感動した作品を明確に述べる。何人かはテーマを出してくる。教員の確認すべき点は、学生自身の自らの感動に対する確信の度合いだ。それが浅いと、あるいは、とにかく目の前の紙に書いておこうという程度のものであると、先に行つて、行き詰まる。感動とは素朴な表現だが、特に卒業論文のように、学生にとっては初めての長期的作業にあつては、それがなければ続かない。だから、ここは時間をかける。

#### 学生の関心の位置づけ

ひとりの学生の仕事に対して、のこり全員が質問ないしコメントを述べるといふかたちは、いつの間にか、固まっていた。少人数であればこそ可能な形態だ。複数の学生と教員の、このころ風に言えば、コラボレーションと言つてもよい。学生各自に自己責任を課すというところではよいが、こうすることで、教員の負担はある面で軽くなり、ある面で重くなる。軽くなるというのは、教員が教室で語られるすべての言葉を自分ひとりで埋める必要がないため、考える時間が確保できる。重くなるというのは、学生は自分の持ちうる限りの力で質問や

コメントをするので、教員は、それが発表者の発表内容と本当からみあっているのか、ないしは、目の前の発表者に先行する発表や後続の発表とどうからみあつて全体を構成しうるのかという点にたえず気を配っていないと、演習そのものが空中分解しかねない。

ここで全体というが統一体を束ねておく箍としての教員の力が試される。まとまりを確保するためには、教員は学生が行なつたひとつひとつの発表や質問やコメントの奥の奥まで考え、それを当該の学問領域の全体のなかに、そして各自の発表が織り成す当該年度の発表群という全体のなかに位置づけておく必要がある。つまり演習そのものの時間外にも、ぼんやりとでも、演習参加者全員の関心のありようについて考えていなければならないということで、これは、コマ数に換算できない。これは学生と教員の関心が近づけば近づくほど、効率がよくなる。

学生の関心の位置づけでは、ひとつ、心から感心したことがある。かつてロンドン大学のパークベック・コレッジに実につまい授業をする先生がいらした。大学院の授業に混ぜてもらつたところ、その刺激的なこと、一度参加したらやめられないというほどのものだった。先生は学期の始めに、院生相手に自分の研究している作品、好きな作品をみなに述べよという。一週間後、先生の研究室のドアに、十数人分の作品を絶妙の配列でならべた掲示がでる。作品といってもそこには文明論風の評論も入っていた。さて、その十数冊を慌てて買いに走るのだが、こんなことがあった。ロンドンのマレット・ストリート(コレッジは前世紀までそこにあった。現在はラッセル・スクエア)から

トテナム・コート・ロードを経て、チャリング・クロス・ロードのフォイルズという大書店にころがるようにして向かう。何冊か買う。二冊ある本はあとで買うとする。すると、翌日にはだれかが買ってしまつて、たいへんなことになる。それを一週間に一冊読み、演習で何か言わされる、あるいは言えないことを思い知らされるのだから、つくづく勉強になった。だが、よくよく考えてみれば、院生たちは、英語で育ってきた。あらためてそう思うと、気が楽になり、以降は、楽しく本が読めた。まだ、未曽有の金融危機もなければ、九月十一日もない、のどかな前世紀のことだ。

研究会でも、刺激的なものと、あとからじわりとくる社会的かつ刺激的なものがある。

後者の典型に、ある作家の研究団体の日本支部がある。これは単独作家では会員数の多い学会で、毎回、発表者一人とシンポジウムが行なわれたり、発表者一人と講演があつたりする。講演は英語で行なわれることも多い。要するに盛りだくさんのだ。

すると本体で大きく時間をとり、内容についての議論は懇親会回しとなる。ところが、懇親会となると、業界の話になるので、当該作家の作品とエンゲルスの関係、といったことに話がおよばない。発表の内容の咀嚼は後で分厚い『会報』を読みながら、ということになる。

ある女性作家の学会の懇親会も最初は不思議だった。残るのは三十名くらいだが、全員が近況を言われる。これを嫌う人もいるが、ある方の、にこやかに懇親会の司会進行をされていたのが、自分に番がまわり、私もこの春、夫をなくし、などとおっしゃるのを聴くと、そ

の話の挟みかたの絶妙のタイミングに感じ入り、迫力に気圧されて、女性作家の研究では女性には勝てないと感じてみたり、もっとまじめに研究しようと思つたりする。

#### 体力が基本

前者の形態も最近増えてきた。つまり発表小一時間に対してコメントやら質問やら聴衆による自説開陳が二時間も三時間も続くというかたちだ。これは勉強になる。発表者は消耗しつくすし、コメントや質問をするほうも、ふくらはぎの運動をしないと血栓がでかかねない。さらに懇親会でもまた延々と議論をする人たちがいる。若いころにもつとこつという研究会に出ておけばよかつたとつくづく後悔している。若いころにもつと勉強しておけばよかつたと言う老人の境地が痛いほどわかる。

これを学部の演習に応用するには、コーディネーターである教員の記憶力と学識と機転が鍵となる。そして何よりも、参加者どうしのお互いに対する信頼感の存在が基礎となる。理想だけは高くもつておかないと、どこまでも落ちてゆく。

#### とにかくあるものを引き出す

さて、この余談に入る前、作品とか本とか書いたが、これは作家論や作品論の場合のことで、英米文化学科であるから、文化に力点をあ

けば、これらのことをテーマとおきかえてもよい。たとえば、『荒涼館』について研究したい、と書く学生もいれば、チャールズ・ディケンズについて研究したい、と書く学生もいれば、十九世紀イギリスの労働者のおかれている環境について研究したい、と書く学生もいるだろう。シェイクスピアを研究したいという学生もいれば、『十二夜』を研究したいという学生もいれば、シェイクスピア劇におけるユダヤ人について研究したいという学生もいる。

ここで大事なのは、テーマが大きすぎないかという点をおさえておくことだ。ひとりの作家をまるごと研究するなど、学部段階でできることではない。たとえば、「近代とは」とは実に魅力的なテーマだが、大人何人がかりでもなかなか目的地が見えてこないだろう。学生の大きな志に掉差することなくまとめていくことが重要だ。

### テーマをしぼる

そこで(五)テーマを絞る。絞りながら(六)目次をつくる。ここも時間のかかるところだ。これをしっかりやっておかないとあとで行き詰まる。(七)できあがった学生から(五)と(六)の結果をA4の紙に書き、コピーをし、全員に配布した上で、それを読み上げる。(八)全員がこのテーマと目次について、コメントや質問をする。大學生ともなれば、もう大人で、みもふたもないことを言う学生はいない。発表者のよいところを拾っては、そこをほめる。それでいて疑問箇所については、どうしてかと、やわらかくたずねる。アルバイト先

やクラブで人間関係を鍛えられている。教員どつしの会議より、よほど大人に見えることすらある。

(八)は時間をかける必要がある。他の学生のテーマや目次にコメントをすることで、自分のテーマや目次への反省が生まれる。同世代のコメントや質問は同世代の直面している諸問題を反映しているので、往々にして教員が発することのできぬものも含まれている。各自が満足し、教員としてもこれなら書き進められる、つまり先で袋小路に入り込むことなく、若干の修正を覚悟すれば書き進められると納得できるまでには、一、三コマかかることがある。

### 参考文献が集まるかを確認する

こうして目次ができあがる。「はじめに(序論)、第一章、第二章、第三章、第四章、第五章、おわりに(結論)、注、参考文献」とおおまかに全体をわけておく。それぞれのなかにさらに小さな見出しをつくるのだが、それはテーマしだいの問題なので、ここでは立ち入らない。

それから(九)参考文献が集まるかを確認する。インターネットをつかつての検索は学生が一番得意とするところだ。教員の役割は適当なサイトを教えること、学生が見つめてきた参考文献に序列をつけることだが、それとても、下手に口を出すと、学生の勉強にならない。また、テーマを決める前に大量の参考文献を参照すると、学生はそもそも自分で当初何を考えていたかがわからなくなる。参考文献の渦に

まきこまれてもいけないし、独断ですすめてもいけない。バランスが重要だ。<sup>4)</sup>

「共感をもって書け」

いよいよ、(十) はじめに(序論)を書き出す。分量は全体の構想を述べた量となる。これも日数を要する。(十一) はじめに(序論)ができたところで、「コピーをし、全員に配り、執筆者の朗読のあと、全員がコメントと質問を行なう。教員は、他の学生がしのこしたコメントと質問をする。その後、文章のおかしなところをすべて直す。人の文章を直すなど、いくつになっても僭越な行為だとは思って、一方、自分のうまい下手とは別に、人の文章には的確なことが言える。同世代の他の学生も、自分の文章の弱点以外は実によく気が付く。用語の使い方のあやしげな部分も、他人には隠せない。

最初の一文が出てこないこともある。そういう時は、学生に口頭で最初の一文を言うてもらおう。口語になってしまう。それを論文調に直す。最初の一文ができると、そこからまた何か必ず言いたくなる。こうして数個の文章からなるまとまりができあがる。そこから学生が何を言いたいかを把握し、必要なら、またばらばらにして直す。

はじめに(序論)は、卒業論文の場合、せいぜいのところ、千二百字止まりだろう。短い分、ここは徹底的に議論する。ただ、はじめに(序論)がどうしても書けないという学生には、いきなり第一章から書いてもらおう。こうして文章にみんで手を入れることによって考察を

深めていく。

ここまでの作業は手順であって、どうしたら書けるかではない。そこで一箇所だけ遊びを入れたい。遊びというのは、これからふれる教訓が卒業論文の書き方ではなく、およそ書くこと一般に関するものだからだ。ただ書くこと一般のなかに卒業論文執筆も入るのだから、以下の教訓は応用可能と思われる。現在英語圏でよく読まれ、その名文をもってなるV・S・ナイポールがジャーナリストの父から与えられた教訓を自分の言葉としてまとめたものだ。

- 一、長い文書を書いてはならない。一文は十語あるいは十二語以下が望ましい。
- 二、おのおのの文章は明確な主張をすべきである。後続の文は先行する文に新たな主張を加えるべきである。よい節とは明確で相互に結びついた文章の連続である。
- 三、ビッグ・ワードを使ってはならない。もしコンピューターで自分の使う語の平均文字数が五字以上の場合には、どこがおかしいはずだ。スモール・ワードを使うことで自分が何を考えているかを考えざるをえなくなる。たとえ難しい思想もスモール・ワードに分解可能である。
- 四、意味が不確かな語を使ってはならない。この規則を破るのであれば、他の仕事を探したほうがよい。
- 五、初心者には色、大きさ、数字を除き、形容詞の使用を避けたほうがよい。副詞も極力少なくすべきだ。

六・抽象を避けよ。つねに具体を追え。

七・毎日、少なくとも六ヶ月間、こつして書く訓練せよ。スモール・ワード・短く、明確で、具体的な文章。奇異に見えるかもしれないが、これが書き手の言語使用力を鍛える。大学で習った悪い言語習慣を排除することさえ可能となる。こつした規則を完全に理解し習得した後、その先へと進むことができる。<sup>5)</sup>

「六ヶ月間」というところが卒業論文を書くものにはうれしい。「大学で習った悪い言語習慣」というところが、ここで紹介するに、はばかられるところだが、文章を書くということを考える上で、これらの教訓は傾聴に値する。父の教訓をさらにただ一言で言つとどうなるか。それは「共感をもって書け」であつた。<sup>6)</sup>

ちなみにV・S・ナイポールは自分の受けた大学教育についてはしばしば不平をもらすが、それはかれが作家を目指していたからであつて、かれの説明するところの、教授がリーディング・リストを渡し、これを読みなさいというかたちの教育のすべてが悪いということにはならない。そもそも大量の蓄積がなければ、作家にも作家以外の文字に関わる仕事にも、進むことはできないわけだから。

さらに蛇足を続ければ、実は、こういう言い方をするとところにV・S・ナイポールの面白さがある。自分は父に育てられた、弟のシヴアは「女たちに」育てられた、といいながら、どうも、そうではなく、V・S・ナイポールもきつちり母や姉や妹たちに世話をかけていたらしいところなど、その一例だ。それは代表作のひとつ『ピスワス氏の

家」を見るかぎり父親ゆずりのようなところがあつて、ピスワス氏も妻の実家やその親族から逃れようとするものの、困つたときはこれにたよりきる。V・S・ナイポールが、旧植民地の知識人に気がない理由もここにある。独立を主張しながら何かのときには宗主国にたよっているではないかとも読める。『ピスワス氏の家』は、宗主国の側を喜ばすものにすぎない、という言い方も可能だからだ。

いずれにせよ、ここでは、大学に行くとき文章がまずくなるという主張の背景の奥は深いという点だけ確認して先に進もう。

さて、卒業論文の話だ。書けない、書けないと深刻に悩む学生も出てくる。そういうときは、その深刻の程度に応じて、書くことの苦しみを書いて文章を紹介したり、では、しばらく書かないでいたらどうかと嘗試してみる。

そうしたときに出す例の極北は、フランツ・カフカの『万里の長城』<sup>7)</sup>だ。これは万里の長城建設にあつた人々があの巨大な建築物をつくるにあつて、その仕事の全体像の大きさから、いかに絶望に打ちひしがれることなく、仕事を完遂したかということをめぐるカフカの推論を作品化したものだが、目指す構築物の違いはさておき、この話をしなければならぬほど、卒業論文で悩んでいる学生の数はくわすだ。みな、そこまで行かずとも、さりと書いてくる。ましてジャック・デリダの『掟の門』<sup>8)</sup>をめくって『を出し、書き始められないということはどういうことかと説き始め、伴走者の責務を忘れるにいたつたこともない。学生にはたいへんなことだが、たかだか一二〇〇〇字とか一五〇〇〇字とか、せいぜい二〇〇〇〇字におさまる論文で、そ



という話にはならない。

### 注をつける

今、こうしてなんとか、はじめに（序論）ができあがったとする。次に、第一章執筆に入る。ここからは注付けとの闘いだ。だいたい学部の四年生は、いや、ものを書き始めた大学生は、自分の言葉と他人の言葉の区別がつかない。この区別をつけるのが注付けの勉強だ。はじめに（序論）にはあまり注が入らない。自分の高邁な展望をやや高揚しながら述べるはじめにあっては、流石に学生も、あちらこちらをのぞかない。しかし、対象作家がいつつまれたのか、対象作品がどういう筋かと第一章に入るやいなや、自分の言葉をなくす。そこで、注がいる。

何を、長文として引用し、何を「かっこ」に入れて引用するかの区別をつける。この練習は時間がある。毎年、秋ともなると、この注がつけられないという学生が出てくる。

### 夏休み

以上の作業を繰り返し、第一章まで完成するのは、早い学生で夏休み直前のことであろう。ここで夏休みに入る前に全員の進行状況を確認しておく。秋の第一回目の授業までに、どこまで仕上げてくるかを全員分確認する。対象作品の読解が終わっていない場合には、夏休み

をつかって読む作業を進めることを指示する。たとえば、十九世紀の小説であれば、原文にして一冊四百頁から八百頁あるから、一日何頁と決めておかないと進まなくなる。翻訳を参照しても、その翻訳がまた長いし、訳語も難しいので、時間がかかる。シェイクスピアなどの場合は原文で読むだけではなく、芝居を観たり、DVDを観たり、複数の翻訳にあたったりということ、時間はいくらあっても足りない。そうして夏休みに入る。

夏に強い人と弱い人がある。夏に読みやすい本と読みにくい本がある。インドの英語小説、アフリカの英語小説、カリブ海域の英語小説は、どうも夏向きのように思える。反対にイギリスの小説などは秋、冬のほうが読みやすい。といって、チャールズ・ディケンズを卒業論文に選んでしまえば、秋、冬まで待つわけにもいかない。だから外国のものを日本で理解しようとするとは、相当無理なことをしているのである。

ひとりの作家でも、夏向きと冬向きがあるが、話が長くなるので、ここまでとする。ジャンルごとに適した季節があるのかどうかも面白い話題だが、卒業論文の話の域を出てしまふ。

夏休みは一瞬のうちに終わる。学生が教室にもどってくる。夏休み中の卒業論文執筆の進み具合を確認する。ここでどういう結果が出て、教員は淡々とする。アルバイトや旅行を経験し、健康な顔で教室に戻ってきたということひとつでも、ありがたいことだ。

ただ、この段階で、まだほとんど手がついていない、ということがあると、これは由々しい事態だ。個別の対応をしなければならぬ。

いずれにしても夏休み明けは全員調子が上がらないから、形式の話をする。表紙をどうするか、目次をどうするか、そうした話をする。これは学部や学科で異なる。

### 完成まで

こうして秋の第一週、第二週の授業が始まる。ここで演習参加者の性格が出てくる。春学期までは、出席者全員でコメントと質問を行なったが、進行状況に差が出てくると、そうした形式を前に躊躇する学生が出てくる。遅れた時間を取り戻すために、自分の卒業論文だけに専念したいということらしい。あるいは、進んでいる他人と遅れている自分の差を見るにしのびないということかもしれない。教員としては、全員の前で重要なことを言っているわけだから、それをひとりひとりに繰り返すような体制は、お互いの時間の浪費とも思える。しかし、最終目的は学生が書き上げることなので、ここは臨機応変に対応する。それぞれの執筆ペースは、ばらばらなので、教員はあたかも編集者のような役割を演じる。毎回どこまでできたかチェックし、次回までの予定をチェックし、確実に書いてもらう。

十二月中旬を締め切りとすると、十一月中に出来上がる学生が出てくる。早い学生は形式もしっかりしている。形式に目を配る余裕もある。教員は全体に目を通す。あと少し直すと格段によくならない場合を除き、それで提出とする。格段によくなくなるならぬかを見抜くのも仕事のうちだが、日頃、細かく見ているので、その点は日頃の

段階でチェックし、少しでも上を目指すという指導をすれば足りる。四年生から担当する演習で卒業論文の指導をする。時間がなければ、その緊張感には独特のものがあるが、出来具合はどうあれ、全員の提出に勝る充実感はない。

### 二年生の演習

国際教養学部の演習は、二年生から始まる。上記の慌しい卒業論文執筆の一年間の前に、二年次と三年次の二年間の時間があるということになる。ただ、二年生である教員を選んだ学生が四年生までその教員の指導を受けるかどうかは、わからない。二年生から三年生になる段階で、ある条件のもと、演習を変更する学生が出てくることもありえる。加えて、現二年生は、秋学期に、その多くが海外留学に出るので、数ヶ月して戻ってきたときには、春学期のときにもっていた関心とは別のものをもって帰国するかもしれない。

そこで、今いる学生は一年後、別の演習を選択するかもしれない、また、別の学生が一年後入ってくるかもしれない、という前提で、運営を行なうことになる。

シラバスは、およそ十九世紀から二十世紀までの英語圏の小説を読みつづ、そこでとどまるもよし、そこから文化と言つてもよし、といふかたちにしたが、実際に第一志望で選んだ学生の頭には英語があつた。

「英語で」と「英語を」

「学生の頭には英語があった」と書いたのは、「英語で」と「英語を」の違い以前の問題があるからだが、ここではそれに立ち入らない。学生はとにかく英語が好きだった。そこでよくよく聞いて見ると、まず「十九世紀から二十一世紀までの英語圏の小説」については、なんのことだかわからないが、とにかく英語に関わるのだからというくらいに考えらしい。次に、文学が好きだという学生と英語が好きだという学生に分かれる。「英語が好きだ」という学生は「英語を」勉強したい。「文学が好きだ」という学生は「英語で」「英語の」あるいは「英語で書かれた」文学を読むということに抵抗がないということになる。「イギリスの文化を研究したい」という学生も同様だ。

しかし、こういうややこしいことに二年生の段階で深く関わっても、袋小路に入りそうなので、とにかく学生の好きなことを知ることから始めた。

自分でテーマを選ぶ

まずは(一)英語で自己紹介をする。参加者がお互いの関心のありようを知る。次に(二)四年生の演習のときと同様に、英語、イギリス、イギリス文化、英語圏、英語圏文化といったキーワードを使い、自分の関心をA4の紙に書いてもらう。さきほどからA4の紙に拘っ

ているが、これはファイルしやすいことと、こちらが鉛筆でメモを加える余白が十分あるということから、そうしている。(三)各自、全員の前で紙に書いた内容を読み上げる。(四)全員がコメントと質問をする。(五)最後に教員が質問をする。これが四年生の演習であれば、書いたことへの学生自身の関心の深さを確認するが、二年生の場合、時間があるので、浅い質問にとどめる。

以上が、次回からのプレゼンテーションのための下準備だ。

二十分もたせる訓練

次に、(六)次回からのプレゼンテーションのテーマを各自決める。九人の学生の場合で考えると、ひとり二十分、一回の授業で三人。つまり三回の授業で一巡する。これで全員春学期中に四回の発表を行なう。最初の第一回目の授業がオリエンテーションで、十二回の授業が発表のこり二回の内容は、進行中に考えとする。学生との相談の結果、プレゼンテーションは英語で行なうことになった。

九つのテーマが出てきた。一見稚拙と見えるものから、深みのあるものまで、さまざまだが、学生の選択を尊重する。第二回目の授業日に三人が発表を行なった。発表のあとに他の学生が質問をする。英語でも日本語でもよい。聞き取れないから、よい質問ができないと学生が言つ。適宜、教員が解説する。こうして第四回までの授業が終わり、全員発表が一巡する。

そこからが問題だ。第二回の授業で第一回目の発表を行なった学生

に対し、第二回目の発表のテーマを決めてもらう。第二回目のテーマは先のキーワードにからむかぎり、第一回目と無関係でもよい。第一回目を発展させたものでもよい。すると学生は、すぐにテーマが出てこないと言つ。そこで、選択肢を提供する。(七) 第二回目の発表のテーマを自分で選ぶ、教員が第一回目の発表に配慮し、テーマを与える。「どちらがいいか?」と問う。一週間の猶予を設ける。すると、学生は、課題は何かと問う。教員は、か かの選択をした上で、課題を説明すると言つ。課題は難しいかと学生が問う。難しいと答える。では一週間くださいと学生が言つ。

教員は学生の先回りをして、第二回以降の発表のテーマを、いつでも提供しておけるようにするのだが、一方、学生が発表テーマを決めてくれれば、これ以上のことはない。

二年生の演習の段階では、「待つこと」が重要だ。

留学からもどってきた三年生との活動は、別の機会に考えたい。

四年生の卒業論文との格闘については、今のところ、本稿前半で示した時間制限内の手順を応用するつもりだが、学生も変われば教員も変わるから、二年後のことは、ある程度までしか予測できない。そこが論文指導のおもしろいところだ。毎年つかえる同じ方法が確立していたら、それもあやしい。また、弓の名人は弓を持たぬとは、中島敦の『名人』に出てくる話だが、卒業論文指導の教員は自分では論文を書かないとなると、それはそれで別の話になってしまう。

ただ、できれば、冒頭の英文の先生ように、学生の自主性を信じ、自分はそのときどき、前日まで読んでいた本の話でもできればと思わ

なくもない。これもまた鮮度が勝負で、ある意味、実に生産的な自転車操業、はては一輪車操業だ。

早く始めないと間に合わない、とか、そうしたことは、いつの時代も変わらないとしても。

註

- (1) 高橋源一郎。小説教室、岩波新書、二〇〇二年。
- (2) 拙稿「翻訳で何が教えられるか」『中京大学教養論叢』第四十一巻第三号、二〇〇一年。
- (3) この点については、上石実加子著『もうひとりのキプリング——表象のテクスト』の書評(『英語青年』二〇〇七年八月号)で触れた。
- (4) 論文情報ナビゲータ、<http://ci.nii.ac.jp/>や国立国会図書館蔵書検索・申込システム <http://opac.ndl.go.jp/>など。
- (5) Patrick French, *The World Is What It Is*, Knopf, 2008, pp. 45~46.
- (6) V. S. Naipaul, *Letters Between a Father and Son*, London: Little Brown, 1989. 実はこの作家、書くことについて考えるために書いていたと書きたくなるほど書くことにとらわれていた。
- (7) フランツ・カフカ/池内紀訳『カフカ短編集』、岩波文庫、一九八七年。
- (8) ジャック・デリダ/三浦信孝訳『掟の門』をめぐって、朝日出版社、一九八八年。
- (9) 英語圏の十九世紀から二十一世紀にかけての小説についてシラバスを書く場合、十九世紀のカノンに言及し、二十世紀前半のモダニズムにふれ、後半と二十一世紀のポストコロニアルの作家にふれたくなるのが人情というものだが、これを学生にすべて提示すると混乱をきたす。といって、こうしないと、小説の一部にしかふれないことになる。そこで学会などでは、とは分業されてきた。の時代に

は はないから、以前の十八世紀に目が向く。は を受けてのものだから、の勉強も必要だが、を好む研究者は を嫌う傾向にある。は テキストが厚い、内容が俗物的、物神的だとなる。そこに今では も入ってくる。や で行けると決めた研究者は、を無視する。一方 から手をつけた研究者は も も 随時参照しなければならぬが、の一部の作家を読み、その主張を理解するだけでも、大学院時代を使い果たしかねない。研究者にしてこうだから、学部 of 学生に、これを伝えるとなると、気が遠くなるような話だ。解決策は、学生の希望を尊重し、 、 、 のどこかひとつでも入口を見つけた学生がいたら、とにかくそこから入ってもらい、随時、残りのふたつに目を向けるよう促すことだろう。